



Title	Percutaneous sclerotherapy with OK-432 for lymphocele after pelvic or para-aortic lymphadenectomy: preliminary results
Author(s)	柏木, 栄二
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92055
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	柏木 栄二
論文題名 Title	Percutaneous sclerotherapy with OK-432 for lymphocele after pelvic or para-aortic lymphadenectomy: preliminary results (術後に生じた骨盤内、傍大動脈リンパ嚢腫に対してOK-432（ピシバニール）を用いた硬化療法の初期経験)
<p>論文内容の要旨</p> <p>〔目 的(Purpose)〕</p> <p>術後リンパ嚢腫の治療には、経皮的硬化療法が有効である。OK-432はリンパ管腫などの良性嚢胞に対し使用されているが、術後に生じた骨盤内、傍大動脈リンパ嚢腫に対してOK-432を使用した報告はない。今回、我々は術後に生じた骨盤内、傍大動脈リンパ嚢腫に対してOK-432を用いた硬化療法の治療成績を後方視的に検討した。</p> <p>〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕</p> <p>2012年4月1日～2020年3月31日まで術後の症候性リンパ嚢腫に対してOK-432を用いた硬化療法を行った16例を対象とした。硬化療法の技術的成功、臨床的成功、感染の有無、チューブ留置期間、臨床経過などの検討を行った。全例でドレナージ術を施行し、50ml/日以上持続した症例もしくは再ドレナージ術を要した症例に対し、OK-432硬化療法を施行した。</p> <p>対象患者の平均年齢56歳（36—75歳）、技術的成功は100%（16/16）、臨床的成功は93%（15/16）であった。13例で1回、3例で2回目の硬化療法を施行した。硬化療法からチューブ抜去まで7.1（1～20）日、平均観察期間は5（1～17）ヵ月であった。合併症としては、1例は治療1ヶ月後にリンパ嚢腫小腸瘻が生じ、再ドレナージ術を要したが、その後軽快した。</p> <p>〔総 括(Conclusion)〕</p> <p>術後のリンパ嚢腫に対してOK-432を用いた硬化療法は有効であると考えられた。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 柏木 栄二

	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学教授 富山 憲幸
	副 査 大阪大学教授 野々村 祝夫
	副 査 大阪大学教授 木村 正

論文審査の結果の要旨

本論文は術後に生じた骨盤内、傍大動脈リンパ嚢腫に対してOK-432を用いた硬化療法の治療成績を報告したものである。

術後リンパ嚢腫に対してOK-432を用いた硬化療法を行った16例を対象とした。硬化療法の技術的成功、臨床的成功、感染の有無、チューブ留置期間、臨床経過などの検討を行った。全例でドレナージ術を施行し、50ml/日以上持続した症例もしくは再ドレナージ術を要した症例に対し、OK-432硬化療法を施行した。

対象患者の平均年齢56歳(36—75歳)、技術的成功は100%(16/16)、臨床的成功は93%(15/16)であった。13例で1回、3例で2回目の硬化療法を施行した。硬化療法からチューブ抜去まで7.1(1~20)日、平均観察期間は5(1~17)ヵ月であった。合併症としては、1例は治療1ヶ月後にリンパ嚢腫小腸瘻が生じ、再ドレナージ術を要したが、その後軽快した。

術後リンパ嚢腫の治療には、経皮的硬化療法が有効であるが、術後に生じた骨盤内、傍大動脈リンパ嚢腫に対してOK-432を使用した英文での報告はなく、本論文が最初の報告である。またOK-432を用いた硬化療法は有効であると考えられた。よって、本論文は学位の授与に値すると考えられる。